

感動や心地よさを生み出す言語環境

先日、瑞浪南中学校の研究発表会が開催されました。その折に、参観者に向けて校内放送を通して案内情報を提供したのは二年生の女子生徒でした。大変落ち着いた大人顔負けのアナウンスに、参観者は深く感動していました。

瑞浪北中にも素晴らしいアナウンスができる生徒をみつけました。先日、昼の放送に耳を傾けていた時です。聞き手にとって優しいアナウンスが流れてきました。

その時、聞き手が理解する手段としては、音声しかありません。当たり前ですが、音声は耳に届いた瞬間に消えていきますので、後戻りしたり振り返ったりすることができません。したがって、聞き手は耳から入ってくる情報を、頭の中で整理しながら聞くこととなります。

そういう状況の時に最も閉口するのが、「早口」と「間の無さ」です。話し手の都合だけで、情報が次から次へと早口で入ってくる状態。アナウンスに切れ目がなく、聞き手に一息付けさせない間のない状態。このような放送が最も聞きづらい、理解しづらいと言えます。

その日の放送担当だったのが一年生のI・Mさん。放送内容は少なかったようですが、彼女のアナウンスは実に優しいものでした。速すぎず遅すぎずの心地よいスピード、意味の切れ目や話の切れ目で聞き手の理解を待つ間、その二つが兼ね備わっていました。

アナウンスをしている彼女に、私はすぐに感動を伝えたいと思いました。そして、アナウンスのじやまにならないようにと配慮し、直接感動を伝えるのではなく、感動をメモに書いて渡しました。彼女は「ありがとうございます！」とさわやかに礼を言って、放送室を後にしました。

文字にしても音声にしても、言葉の果たす役割は非常に大きいと言えます。相手が理解できるかどうかとも言葉次第ですし、話し手や書き手がどんな精神状態にいるのかも言葉に表れます。使っている人や集団の文化レベルがわかるのも言葉だと言えるでしょう。

意思伝達のツールとして私たちは言葉を使っていますが、それだけの意識ではいけません。どんな場面で、どのように言葉を発するかによって、相手に感動や心地よさが生み出されるということを十分認識して言葉を発することが必要です。

瑞浪北中学校では、環境を大切にしています。環境というと掃除や整理整頓と思いがちですが、言語も立派な環境です。T (Time・時間) P (Place・場所) O (Occasion・場面) に応じた言葉を適切に使えるようになるのが中学時代だと忘れてはいけませんよ。

(十二月一日 記)